683
2017年
6月発行

よろこびの泉

わたし（イエス・キリスト）が与える
水を飲む者はだれでも、
決して渇くことがありません。
わたしが与える水は、その人の
うちで泉となり、永遠の
いのちへの水がわき出ます。

新約聖書　ヨハネ4：14

あじさい

傘

河野　進

今日は
晴れか　雨か
予想がむつかしければ
ためらわず傘を持ってでかける
晴れなら
傘をささずによかった
雨なら傘があってよかった
家を出る時から帰るまで安心させてくれる

河野　進詩集「母よ、幸せにしてあげる」より

発行所　〒630-0266　奈良県生駒市門前町七―四〇　日本ミッション
電話〇七四三（七三）一七五四　振替口座〇〇九三〇―二六四二番
発行人　ファベイ・D
編集人　日本ミッション編集部
印刷所　〒350-0303　埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇
電話〇四九（二九六）〇七二七　新生宣教団印刷部
一年分　送料共　九〇〇円
定価　一部　一八円

質問箱

問　3人の子の父親です。小学6年になる長男は勉強が嫌いで、クラブに入ってサッカーだけに夢中です。サッカーのない日は1日中釣りに行ってしまう、遊び仲間のリーダーです。将来が心配です。

答　低学年時代は、健全な遊びに夢中になる事はとても大切です。充分遊びつくした子どもは、本格的に勉強に向かわなければならないと自覚する中高学年になると、一変して、我を忘れて勉強に打ち込み、塾で付け焼き刃の秀才を、あっという間に追い越してしまいます。

遊びの体験が乏しく、幼少期から無理矢理に机に向かってきた子どもは、覇気がなく、本気で勉強しなければならない時期になっても、精神的に疲れ果て、エネルギーもなくなって意欲が湧いてきません。

遊びの天才こそ、秘められた才能を100％、将来発揮する準備をしているのです。トップクラスの大学合格者の中には、少年時代ガキ大将だった人が少なくありません。遊びに夢中になる事は、一事に全精神と体力を集中させる貴重な体験です。これは大人になった時、問題解決や、研究に我を忘れて没頭する精神力の源泉となります。

しかし、子供が遊びやスポーツに夢中になっている時、「仲間づくりに役立つ」「協調性が育つ」まして「事業経営の基本を身に付けている」などと考えているわけではありません。ただ無心に遊びながら生涯の宝を蓄積しているのです。塾漬けの秀才が、憧れの大学に入学した途端、無気力になり、抜け殻人間となって、4年後社会に出ても役に立たない人も居るのです。

あなたのお子さんは、きっと優れた才能が与えられています。その潜在能力は、創造の神を信頼して祈り求める時、俄然、明らかにされ、道が開かれて、大いに活躍される人生が開かれます。

「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」（イザヤ43・7）

（児玉　博之）

親と子のしあわせ 392

私には、大学三年生の長男、高校二年生の長女、中学二年生の次女がいます。大学生の長男は遠くでひとり暮らしですので、実際一緒に住んでいるのは、主人とふたりの娘です。

朝起きたら「おはよう」と挨拶をして、必ずご飯を食べて、身支度をします。朝食抜きという人がいますが、我が家はみんなしっかりと食べます。

そして出かける前に、長女は「今日も元気に行ってきます」だったり、「今日も一日、笑顔で行ってきます」と言います。いつからこんな風に言い始めたかは分かりませんが、なんだか自分に言い聞かせるような感じで面白いです。それに対して、主人は「今日もがんばって帰っておいでよ」とか、「気をつけて、帰っておいでよ」とか、必ず声を掛け、グータッチをします。

次女は、普通に「行ってきます」です。主人は、長女と同じように声を掛けてグータッチをしようとしますが、さりとかわして出かけます。まあ思春期だからね、と思っています。次女が小さな声で「行ってきます」と言っても声をかけます。

長男が、一緒にいて思春期だった時、何も言わずに階段を下りて行くと、私が「行ってらっしゃい」と声を掛け、主人は「帰っておいでよ」と言いました。私が「『帰っておいでよ』と言うのは何だか変だよ。普通は『行ってらっしゃい。』だよ」と言うと、主人は「帰って来る場所があるというのは、嬉しいことだよ。帰って来るのを待っている人がいるというのは嬉しいことなんだ」と言いました。

確かにそうかも知れません。外で嫌なことや辛いことがあっても、帰れる場所がある、待っていてくれる人がいることは嬉しいでしょう。家が、いがみ合い、傷つけ合う場所にならないようお互いが努力するべきでしょう。

「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。」（Ⅰヨハネ4・7）

（相原　幸紀美）

〒319-1117
茨城県那珂郡東海村東海一―八―七
東海福音キリスト教会
牧師　高氏　博史
電話　〇二九―二八二―一〇三六
礼拝　毎日曜　午前10時45分～11時45分

＊この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。
これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。

Ⅰ面写真：高原幸男

●質問箱への投書（100文字以内）よろこびの泉に関するお問い合わせは Izumi@japanmission.org まで

【お詫びと訂正】4月号の表紙写真は撮影者が高原幸男と記載されていましたが、正しくはインターネットの素材使用です。訂正してお詫びいたします。

思い浮かびもしなかった神の計画
～ノックアウトされた聖書のことば～

茨城県東海村　高氏　博史

私は中学生の頃から、無仏、無神論者に憧れていました。「人は、死ねばそれまで。無になるのだ」と。しかしこの考えは私を孤独にし、かつ虚無観で覆いました。

▲日々、神と教会と人に仕えたいと願いつつ

私は一九四一年七月三〇日生まれ。三歳の時、父は中国で戦病死、三十二歳の若さでした。母は二十六歳で四人の幼児を抱えていました。北海道浜益村（浜益村は２００５年10月に廃止され石狩市に吸収合併される。現、石狩市）の奥地、電気も水道もガスもない陸の孤島と呼ばれた集落が、私の十五歳までの生きる場でした。

祖父の太吉じいさんは毎朝30分、仏教徒としての礼拝を仏壇の前で行い、終わりの5分間に家族6人が「ナマンダア」を唱え、そのあと朝食でした。中学生の時、第二の父役だったじいさんが亡くなり、部落中の人が集まって、墓地の広場で、キャンプファイヤーのようにして火葬しました。その時、火中のじいさんの腕が突然ぴんと伸び、生きているのではないかと思ったほどです。その手は今でも思い出します。父や祖父の死は、人生を考えるようになってからの私に、大きな影響を与えました。

中学を終え、新十津川の砂利トラ屋さんで住み込みの助手となったのですが、そこで私は、学歴の必要を実感しました。仕事は美深町中央通りの舗装工事、重労働でした。夕食の飯場で、私は秋田県から来たと言う年老いた労働者の、羽振りの良かった若いときの自慢話を聞かされ、以来、その労働者が自分の将来のように思え、勉強の必要を痛感したのです。

十八歳で大型自動車の運転手となり、小樽市で働くようになりました。旭川、室蘭、函館がエリアで、昼夜関係なく走りまわっていて、とても定時制高校に行く時間は取れそうも無いので、自衛隊に入りました。そこで通信制ですがＮＨＫ学園の1期生となり卒業できたのです。

聖書と出会うが！

私はここで初めて聖書を見ました。藤森と言う長野県出身の人が入隊時に「母がくれた」と大事にしていたものです。また正木ひろし氏の本を読んで、神の実在について心惹かれる思いもしました。

自衛隊を辞める年、次の仕事を探していた私は、百万人の福音と言う本を手にし、その中に広告のあった会社を見つけ、北海道からは遠いがＮＨＫ学園本校には近いのでそこに決めました。

信愛製作所は神奈川県川崎市溝口にあり、クリスチャン社長が経営する会社で、社員のほとんどがキリスト者でした。杉山社長は入社祝いとして新約聖書と賛美歌をくれ、近くの教会に行くようにと勧めたのです。私はまずは聖書を読もうとマタイによる福音書から読みました。

山上の垂訓と言われる箇所、特に「あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。」（マタイ６・39）と言う言葉はノックアウトものでした。しかし、続く中風の人の癒し、悪霊払い、死人の復活、最後にはイエス・キリスト本人が死んで、3日目に復活したと書いているのには興ざめでした。けれども右頬物語は、私が誇りにしていた道徳心を打ち砕きました。私の良心は、それは良いと思っても実行できなかったからです。私はそのみ言葉を紙に書いて車に貼り、大田区の中小企業の町を営業のために走りました。

初めて教会へ

１９６４年9月、生まれて初めて新城（しんじょう）キリスト教会に出席。私は二十三歳になっていました。教会は学習塾の間借りで畳敷き、その部屋は暗かったものです。私が強い印象を受けたのは献金後の祈りでした。ある男性がその場に立って、何もない空間に向かって祈っている姿でした。私はそれで教会に躓き、二度と行くまいと思ったのです。

しかし聖書には魅かれたので、友人から聞いていた通信講座で聖書を学びはじめました。その結果、聖書やキリスト教の基本的なことには同意できるようになりましたが、キリスト教徒になる決心の段階になると、どうしても引っかかるのが、「聖書の言う神は本当に存在するのか」でした。

私は中学生頃から無仏、無神論者に憧れていたのです。人は死ねばそれまで。無になると。しかし一方でこの考えは私を孤独にし、虚無にしていました。父も祖父も叔父たちも死んだ。自分はそのとばっちりで貧乏で苦労している。ダイナマイト自殺をした知人もいました。歴史を見ても、どんな英雄も犬猫のように死んでいる。あの戦争では三百万人以上の日本人が死んでいる。人生生きるに値しない。苦労し勉強するに値しないのではないのかと悩んでいたのです。そんな中で、キリスト教を受け入れたいけれど、どうしても神がいるとは信じられなかったのです。

心からの祈りに

１９６５年10月のある夜、万年床の蒲団の上に正座し、一大決心をして聖書の神に初めて祈りました。「聖書の神様、もし本当にあなたがいるなら、僕が信じられるように助けてください」と。その瞬間「私は存在するぞ」と耳に聞こえた訳ではありませんが、圧倒的な平安と喜びが心いっぱいに溢れてきて、涙が吹き出し、私は声をあげて泣きました。隣の部屋のことが気になるほどの理性は働いていたので、煎餅蒲団をかぶって泣きました。

これが私が聖書の神様と出会った記念すべき時でした。心の底の方に、汚泥のようにあったあの深い虚無感は消え去り、どうしても信じられなかった死者の復活等の聖書の奇跡が信じられるようになり、聖書は生きたものとなりました。

「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、私を見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。」（エレミヤ29・13～14）この聖書の言葉は私の上に実現し、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」（Ｉコリント２・９）この言葉も、この私に適用してくださったのです。

この信仰体験の後、あの畳敷の教会へ行くようになり、１９６６年4月10日、洗礼を受け、私はキリスト教徒になりました。生きる事は、故郷北海道の春の草木のようになり、死と虚無の雪に埋もれていた私の心の中に、蕗のとうのような思いが芽生えてきたのです。神とその国のために生きたいという思いです。特に教会の祈り会で献身の聖歌を歌う時、心に迫るものがありました。

私は若い時、小さな会社の社長になることが夢でした。そのために信愛製作所に入り、営業と板金技術を身に付け、高校に行き、資金を貯めていました。しかし社長の夢は萎み、神の国のために人生を掛けたい思いが大きくなりましたが、自分の育った環境、学歴や能力等を計算すると、とても神学校に行きますとは言えません。そんな内心の戦いが2年ぐらい続いた後、決着をつけようと１９６７年8月、松原湖バイブルキャンプに参加し祈りました。

「栄光は主に、恥は己に」という思いで決心をして山を下り、次の年の4月神学校に入学。ダメなら夏休みで退学、が条件でした。しかし何とか四年間、皮1枚でもって卒業。牧師試験も合格。

１９７２年4月から長野市、いわき市、杉戸町、新座市、東海村と三市一町一村で、神とその御国のために45年間働くことができ、大いに喜んでいます。現在七十五歳ですが足腰の立つ限り、聖書の素晴らしい神に仕え、その教会に仕えて行きたいと走っています。